



読んでみよう・考えてみよう

## 桂ぼんぼ娘さんのいじめ体験

○桂さんの講話の中で、いちばん印象に残っている場面や言葉をあげて、どう思ったか・感じたかを書いてみよう。

<場面・言葉>

<思ったこと・感じたこと>

○感想を書こう。

### 講演採録

佐賀県が「同和問題啓発強調月間」と定めている8月、各市町で同和問題や人権について考える講演会が開かれた。伊万里市では28日、落語家の桂ぼんぼ娘さん(39)＝東京出身＝が子どものころのいじめ体験を語り、「あの時、死ななくてよかった」と思えたエピソードを語った。講演要旨を紹介する。(山口貴由)

### 「同和問題啓発強調月間」講演

いじめ体験の落語家 桂ぼんぼ娘さん



保育園で、みんなが触るのをいやがっていた「便所虫」と呼ばれる虫がいた。触ればヒーローになれると思つて触ると、みんなから「ばい菌」と呼ばれるようになった。小学校でも、ばい菌と呼ばれ続けた。担任の先生には「いじめ

## 「あの時、死ななくてよかった」

方も悪いが、いじめられる方にも原因がある。どうすれば『ばい菌』と呼ば

ないか考える」と言われた。家族にだけは知られたくなかった。8歳のころ、母が急性白血病で亡くなった。自分のわがままが原因と思ひ、自分のことを家族には話さないようにしようと思つた。3年生になると、いじめは集団化した。机の周りを囲まれ、「ブス、貧乏、くさい、片親」と言われるようになった。いじめている方はそれで笑うので、先生からは盛り上がりつつ見えていたかもしれない。

休み時間がつらかった。着席し

てもおなかが痛くなり、気分が悪くなった。病院で検査しても「体に異常はない」と言われた。それでも気分が悪くなるので、着席して「体調が悪い」と言うと、担任に「仮病を使うのはやめなさい。片親だ」と

なものを食べてないのね」と言われた。家族のことを悪く言われたくないので、黙るようになった。金銭も要求されるようになった。ある日、私をいじめていた女子からなぜか誕生日会に呼ばれた。行くか迷つたが、祖母が白い服とプレゼント用のオルゴールを買ってくれた。これでいじめが終わるかもしれないと思つて家に行

くと、「本当に来たと言われた。ゴミの入ったジュースを飲まされ、服を脱がされた。半狂乱になつて逃げ出した。この後、死んだ方がいい、消えてなくなりたいと思うようになった。手を切りたい、首をつろうとした。手を切らなかつた。「なぜ死ぬのが死ねなかつた。「なぜ死ぬのか」とよく言われるが、私には死ぬか選択肢はなかつた。自殺に失敗し、体は助かつたが、心は死んだ。何も感じなくなつた。たまたまテレビで吉本新喜劇を見た。間寛平さんが演じるおじいちゃんが受け入れられているお笑いの世界を見て、「世界はもっと広い」「受け入れてくれる場所があるかもしれない」と考えること

ができるようになった。勉強をがんばって、自分のことを知る人がいない千葉県の女子高に入学した。最初は友達ができなかつた。2学期に「一緒に弁当食べないか」と言われた。ばい菌と呼ばれていた私が、机をくつつけて弁当を食べた。「あの時、死ななくてよかった」と思った。子どものころから30年たち、ようやく「いじめはいじめた側が100パーセント悪い」と言われるようになった。差別も同じで、差別をする側が100パーセント悪い。子どもたちは考えが柔軟なので、子どもたちから差別意識をなくせると思う。まず大人の皆さんが伝えてほしい。